

〈各論〉の二つを準備すれば、あとは必勝体形となる。本音と建て前が一致している市民は別だが、分裂市民はこの硬軟両面作戦にあって手も足も出ない……」と指摘されています。まさに保育園入園措置業務における私達の言葉が、この事を具現化したものでなくて他になにが有るでしょうか。

老人福祉においても、在宅サービスといってもヘルパーさんが、1人平均6世帯も受け持って十分なサービスができるかどうか考えてもみてください。おしめの洗濯から、話し相手、夕ごはんの買物から病院への送り迎え等あらゆる生活の場面に溶け込んでやらねばならない仕事量からみたら、現在の人員ではとても無理です。

生活保護でも、ケースワーカー1人の持っている世帯数が、平均90世帯を越えている現在、きめの細かいサービスなどとてもできません。とくにその生活保護基準の低さは、この物価高、インフレの時代に、例えば4人世帯でAさんとしませんが、夫52歳、妻42歳、子ども12歳と10歳で月額90,610円になるが、今の時代に生活が可能かどうか、どうやって毎月の生計をたてて生活しているのか、ケースワーカーとして保護者に聞くのがこわい位です。白書の中でも、原田氏の発言で「弱い立場の市民」で訴えられておりましたが、もっと鋭く追求して欲しかったと思います。

公務員としての立場にしばられる私達が、直接仕事の中で直ちに解決できるものはわずかです。

当然自分の時間に取り組まなければなりません。そこでふた通りの生き方が出てくるのです。自分の時間をさいてぶつかる者、または業務時間が終われば、一さい切り捨ててしまう者。だが公務員も人間である以上、後者をせめる事はできません。現場で働く私達の仕事は直接住民に接し、住民の要求を解決するものであるが、そこには必ず行政側の条件が壁となってきます。私個人としては、

何とかしたくとも公務員としての立場がそれを許しません。みんな板ばさみで悩んでいるのです。白書の中で、特に、福祉行政の点では第1部での「発言」のところでもっと多くの注文やら告発や訴えが載っていると期待していたら少し期待はずれで、鋭さが欠けていた感じがいなめません。

第2部の市民福祉の部分もきれいに分析的に眺めているだけで、市独自の考え方とか、私達現場の生の声とかが少ないように思われました。

1日8時間住民との対応及び事務に追われている私達にできることは、矛盾点を指摘していく事です。しかし現実に必要なものは、「次に何をするか」です。そこで行政—企画部門—に対する要求が出てくるのです。常に現場からあげられてくる問題点を組み入れ、福祉行政の方針を示していくべく部門を確立することを。そしてそれに基づいた十分な人事が行なわれることを。

そして現場の職員が1人残らず、日常の仕事の中の矛盾点を痛みと感ずる姿勢を持ちつづけられることを。

私たち現場に働くものは、つい自治体の中で行政の貧困さの弁解者になるような立場にたたされませんが、本来は、その反対で、私たちも市民であり、共に問題意識を感じ、市・国へ要求する者であることを確認していきたいと思う。

〈民生局南福祉事務所保護係 佐々木裕子・神奈川福祉事務所保護係 小泉秀信〉

## 市民は単なる住民ではない

4年に1度地方選挙が行われる。市民に対して4年間の行政の総決算の意味を含めて市民生活白書が刊行されるのであろうか。

白書を読んで感じたことは、激しいインフレの嵐の中で、消費経済と市民福祉に重点が置かれ、同

時に市民の側に立った編集に努力が払われていると思う。前回白書の主テーマであった「横浜と私」を受けて、今回の主テーマは「私の横浜」であり——ここにいう私が、横浜の市民なのであろう。私という事を前面に打ち出すことにより、市民に対する呼びかけと働きかけを感じる。

市民がどのような生活感情をもっているか、市民の手による生活作文「私の横浜」の中に、或いは実態調査・意識調査のアンケートと分析「横浜の私たち」の中に読みとることができる。また広範な行政の実情を「横浜の10年」の中に図表による時系列の移り変りをとおしてその輪郭を知ることができる。限られた紙面の中で、わかり易くまとめられており、多くの市民が読まれたらよいと思う。

然し、白書を読むのは、自分の置かれている環境についての単なるもの知りや、他人は何を考へ何をしているのかの動向を知ることによって、同感したり共鳴したりして終るものではないと思う。読むことによって問題点を整理し、明日への運動の方向性を得ることが望まれる。

市民にはいろいろな生活感情と要求とがあることが判る。これを行政がどのように汲み上げ、どのように組み立て、どのように実現してゆくか「運動の方向性」のモデルを具体的に表わして欲しかった。そうすることによって、より多くの市民「発言層はもとより、沈黙層」に対して呼びかけ働きかけることができるものと思う。

市民生活白書を通して、住民と市民との関係について考えてみた。そこに住んでいる人達が住民である—それは判る。また行政区画である市に住んでいる住民を市民「市の住民」というのも判る。然し住民と市民とを区別する本質はそうではあるまい。市民とは権利と要求に目覚めた一人一人が横に連帯し討論と同意のうゑに自分達の環境を含めた諸問題を解決し合つてゆこうとする市の住民で

ある。したがって市民は単なる住民ではなく自主的に自己統治〈自治〉に目覚めた住民のことである。

とすると住民のうち市民はどの程度いるのであろうかと思つたりする。市民生活白書もあるいは住民生活白書であるのかも知れない。

現状を政治—行政—住民・市民の線で把えるとき政治や行政に対する不信感は強い。政治に見放され、政治を見放した住民がまことに多い。この現状の中で、行政が住民の側に立っていろいろな要求を、話し合いの輪を拡げつつ、どのように行政に反映し、どのように政治を動かしていくのか、その運動の過程が即住民から市民への変革の道であり、その出発点は住民の諸要求であると思う。さまざまな要求をかかげた住民運動〈白書・表—25〉をどう扱い、どうリードしてゆくかが、地方自治の行政の基本的課題であるように思う。

住民集会・市民集会、住民との対話・市民との対話、住民参加・市民参加、住民運動・市民運動…等いろいろの概念がある。これらはいづれも理念と具体的な要求をもって現れる。これらを実現する過程は、計画10年、実施10年といった気の長いものであり、従来の日本的せっかちさを先ず克服してゆかなければならないと思う。

〈計画局港北ニュータウン建設部建設課長 田代善雄〉

## 「私の横浜」がない

第1部を読了。あら、シラケている人なんて1人もいやしない。横浜に限りない愛着を抱いていて、身の囲りのちよつとした事に素直に反応して地域には積極的に楽しげに尽そうとする人達ばかり。ホットでお人好しで充実している。私とは住んでいる世界が違うのかしら。それとも……？  
編集者の危惧と配慮が、〈横浜の人たち〉のグラ